様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 28 日現在

機関番号：12701
研究種目：基盤研究（C）
研究期間： 2009 ～ 2012
課題番号：21530961
研究課題名（和文） 公立小学校教員の外国語指導力アップのための研究
研究課題名（英文） Enhancing public elementary school teachers' capabilities to provide effective English language instruction
研究代表者
満尾 貞行（MITSUO SADAYUKI）
横浜国立大学 大学教育総合センター 准教授
研究者番号：60229739

研究成果の概要（和文）：「小学校外国語活動」の分析・評価のための観察シート作成を目的とする。過去 4 年間では、観察シートに入れるべき観察項目を見出す研究が中心になった。小学校教員と大学生によるティーム・ティーチングの授業観察・分析、小学校教員のみによる授業の観察・分析、中学生への意識調査と授業観察、小学生の英語オンラインレッスンの観察・分析等を通して、複数の信頼性・妥当性のある項目を見出した。
研究成果の概要（英文）：The final purpose of this research is to develop an observation system for English language activities that are part of the elementary school curriculum. Over the last four years, the research has focused on determining specific criteria which could be included in an observation system. Data was obtained through the observation and analysis of: elementary school teachers and university students engaged in team-teaching, elementary school teachers in traditional settings, junior high school English classes, children and instructors in an on-line English program, and a questionnaire administered to the junior high school students. Several criteria were found to have statistical reliability and validity.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総 計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学 教科教育学
キーワード：小学校外国語活動 授業観察シート クラス担任 ZDP 保護者 小中連携 日本版 COLT

１．研究開始当初の背景

教室におけるティーム・ティーチングを最大に生かすには、指導者各自の特徴を生かし、かつ相互のコミュニケーションを常時する

ことである。筆者の前任校(東京純心女子大学)では、授業の一環として学生が近隣小学校に赴き、「国際理解教育」の時間に英語活動の補助指導を行ってきた。また、大学と近隣の公立小学校共催により教室を離れた英語キャンプを計画し、実施してきた。このように英語活動を実施する過程で、小学校教員、大学生、大学教員による連携の在り方、各役割が研究課題となり、授業評価研究へと繋がった。よりよい授業を実施するための授業分析とその評価である。

２．研究の目的

以上の研究背景により、①より良い授業を目指した授業分析・授業評価のための観察シート作成、②および、観察シートを用いて小学校教員の外国語活動における役割、在り方を考察し、公立小学校教員の外国語活動指導力のアップの一助となることを研究の最終目的とした。本研究では、まず第一に観察シートに取り込むべき着眼点を見出すことが大きな課題であった。

３．研究の方法

本研究は複数の研究の積み重ねから成っている。各研究について、その方法を述べる。

(1)観察シートの作成にあたり、COLT (*Communicative orientation of language teaching observation scheme*) をその基盤とする。それ故、長年研究をすすめてきた中学校教育実習生の授業（英語）分析のために観察シート（日本版 COLT）で収集したデータの分析の見直しを図り、小学校版を作成する参考にする。

(2)学校インターンシップにおける小学校教員（T1 とする)、大学生（T2 とする）の役割の再分析により、見出される着眼点の確認。小学校教員の役割から小学校教員の優れた着眼点を見出す。

(3)見出された着眼点が上記の公立小学校（複数）以外の小学校における授業でも見出され、授業として成功しているかを検証する。

(4)小中連携の視点から着眼点を見出すことを試みる。

(5)対面方式のオンライン学習プログラムを分析する。このプログラムの学習者は小学校 4 年生から 6 年生の複数の児童であり、講師は英語を母国語とするアメリカ人講師である。分析を通して、公立小学校の授業観察のみでは見逃しがちな指導者の指導と児童一人一人の反応等に着目することで着眼点を見出すことを試みる。

４．研究成果

(以下、各番号は「３．研究の方法」の番号と一致している。)

(1)実習生(57 人)、実習先指導教員(28 人)、英語科教育法担当大学教員（19 人）に 5 人の実習生の授業（ビデオカメラで撮影、編集して約 50 分に短縮）を見てもらい、作成した中学校版 COLT に記録してもらうと共にその授業に関してのアンケート等に回答してもらった。分析結果として、以下の 3 点を見出した。1 点は、実習生の指導の傾向である：①新出の文法事項や文型の導入において実習生と生徒の間にインターアクションがなく、実習生の一方的な説明になっている、②生徒にあまり質問をしない、③音読練習が少ない、また④生徒が英語でも日本語でも発話する機会が少なく、実習生の日本語使用が顕著である。2 点目は、実習生の実習授業におけるいくつかの指導技術に対する評価の点で、実習生グループと他のグループに有意差があったことである。3 点目は、実習生の授業に対する評価はグループ間で有意差があったことである。同じ観察項目に関して、Rashomon effect のような影響もなかった状況で授業評価に違うがあるという点は注目すべきことであり、実習指導上有効な観察シートを作りうることを見出せた。

(2)授業観察者（直接観察、ビデオによる観察）のアンケート回答の分析。授業観察者は、大学教員（4 名）と小学校教員（7 名）、2 年間公立小学校で英語活動指導に参加してきた大学生（8 名）である。必要に応じ研究担当者によって、小学校教員、児童にインタビューを実施する。これに反省会（大学生、小学校教員、大学教員）の記録も参考にした。同年度の前期（～7 月）と後期（9 月～）で回答に変化が見出された。後期回答に授業の成功に結びついていると思われる着眼点を見出すことができた。三者の共通の着眼点として、（あ）児童の反応をみた指導、（い）個々の児童の活動参加、(う)児童全員参加、（え）考える活動と体を動かす活動の組み合わせ、（お）目的を考慮した指導、（か）内容量が適切であること、（き）児童の効果的指導技術(く)児童に合わせた英語指導、(け)効果的展開、（こ）三者の教室内でのコミュニケーションがある。

次の課題として、見出した着眼点の検証を行う必要があった。見出された着眼点と授業評価の関連性を調べた結果、成功した授業では以上の着眼点を生かしていることがわかった。

(3)この研究は、第一に、クラス担任主導型の英語活動と ALT 主導型の英語活動の教育的効果を数値分析し、各授業実施の際に教員が持っていた着眼点を明らかにすることで、より有効な着眼点を見出すことであり、第二に前段階の研究結果より見出した着眼点と比較をすることで、見出してきた着眼点の有効性の検証をすることである。新たな着眼点を見出すことも目標としている。研究対象の二小学校のうち、中野区立某小学校（A小学校）では、iii、iv が小学校クラス担任（ＨＲＴ）の主な役割、立川市立某小学校（B小学校）のＨＲＴは、i を中心に ii、iv もこなしていた（以下のリスト参照）。A小学校では、派遣会社からくる ALT とティーム・ティーチング（TT）を実施し、学習指導案は派遣会社で作成されたものを使用した。B小学校では、小学校クラス担任が指導案を作成し、立川市と契約を結んでいる ALT と打ち合わせをして授業に臨んでいた。B 小学校では、打ち合わせ時間の確保、事前の英語指導案準備で、ALT との打ち合わせ時間の短縮化と合理化といった工夫ができていた。

小学校教員役割リスト

(i)授業中の活動にティーム・ティーチングとして参加できた。つまり、大学生と一緒になって児童に活動指導をした。
(ii)授業中の活動に、児童と一緒になって参加できた。
(iii)
授業中の活動には i、ii いずれの形でも参加していないが、クラスの進行を助けるために、児童指導などを行った。
(iv)その他(必要に応じた日本語による個別支援、児童の理解の様子を把握し適切な支援をしたり、時間管理、機械操作・教材提示といったサポート、予定の役割は務めたか、など)

分析する 2 種類のデータの１つは授業評価アンケート回答、もうひとつは事前打ち合わせでどのような点について話し合われたかを知るアンケート回答である。回答者は、各小学校の英語活動の授業（TT）指導をした教員、ALT および授業観察者（同じ小学校の同僚教員、筆者）である。２種類のデータを調べ 2 点わかった。

①両校とも「児童の授業参加方法」についての打ち合わせをするが、B では更に突っ込んだ打ち合わせをする。その打ち合わせがよりよい授業へと繋がっている可能性が高い。

②「授業中の役割分担」に関しては、B のほうがよい自分の役割、授業へのかかわりに対して積極的であることを示していると前述したが、この積極性は他の要素とも絡みよりよい授業に結びついていると考えられる。B 小学校は、自分たちで工夫した英語版指導案を作成し、それを見ながら ALT との打ち合わせを実施している。毎回の授業の流

れは同じで、内容的な部分を変えることで英語版指導案はできる。流れを同じにすることで、TT がスムースにいくことは無論、児童たちが同じリズムで授業を受けられる。

より良い授業と相関した着眼点項目は、「児童の理解への工夫」、「新しい英語表現導入への工夫」、「新しい英語表現のレベルとその後のコミュニケーション活動」「授業全般の授業形態/授業レベルの適切性/本時の目標の明確化・確認」、「授業中の役割分担の明確化：担任の参加内容」、「児童の授業参加方法の工夫（G活動、個別、一斉）/児童の参加内容（質問に答える・発言をする・質問をする）」、「英語版指導案の活用」であった。以上の着眼点は、学校インターンシップにおける小学校教員の持つ（有効な）着眼点とほぼ一致していることがわかった。

(4) この研究の主眼は、小学校外国語活動への学習者の関心・意欲の高い要因を探り、同じ要因が中学校の授業においても見出されるか、という点である。指導教員も含めて学習環境が異なり、学習者自身も様々な面で成長している段階であるが故、小学校で観察される活動と中学校で観察される活動の多くは異なる。しかし、その中で共通の要因を見いだせるかということを前提としている。一般に学習者の関心、意欲は学校要因以外にも多くあるが、本研究では学校要因、特に授業内の指導や活動に焦点を絞る。回答は１年生の記憶を頼りにしている。信頼性を高めるために、附属小の小学校外国語活動ビデオ記録、学生のジャーナル、筆者の記録で回答の確認をとるようにした。附属中の半分は他の小学校（主に公立小）出身であり、この半分に関しての回答を確認できるようなデータはないため、ベネッセの全国規模の調査結果等をその代替とした。回答者は 129 名である。

附属中1年生は、学習者の小学校外国語活動の授業で、英語への関心、意欲は高められて附属中に進んできている。その要因は、英語活動の特徴によると言える。その特徴とは、①英語を使う、②英語でコミュニケーションする、③みんなで協力する、である。また、小学校外国語活動で学習者の興味・関心を高める活動と中学校の英語の授業内容との関連性が見出され、附属中の授業で英語への関心・興味は持続、またはさらに高められている。

「（中学の）英語学習でつけたい力」という質問の回答では、「（小学校の英語活動では）英語ゲームが楽しかった」を選択した回答者の過半数である41名が、「外国人の人と英語で話せるようになりたい」を選んでおり（複数回答可）、積極的なコミュニケーション志向があることを窺わせる。ベネッセ（2011）は、回答の因子分析結果として、回答者である生徒たちがもつ英語学習への動機は、①コミュニケーション能力の向上、②英語が好き・面白いと報告している。附属小・他の小学校における英語活動の楽しい要因、附属中学校における英語の授業が楽しい要因の一つが、「英語で発話し、意味のある、内容重視のコミュニケーションを図ること、図ろうとすること」であったことからすると、①と②の間には、相互関係があると言える。今後中学の授業等で伸ばしたいスキルは、「話す力」であり「書く力」であった。発信型志向の学習が多く、コミュニケーションしたいということが学習動機づけになっていることに間違いはない。「発信型」の機会をいかに指導上に取り込んでいくかが鍵と言える。

(5) 本研究では、観察対象になった子どもたちと講師の分析を中心に、子どもたちや利用者の保護者、それに講師の方々のコメントを主な参考資料として考察した。このプログラムはある教育関連の出版社が試験的に企画

したものである。オンライン学習のレッスン全12の様子を最終的には、20人のうち7人の児童の受講の様子を観察（児童 A～G)。全員海外経験はなく、このプログラムへの参加理由は「ネイティブ・スピーカーと話したいから」であった。小学校外国語活動の授業以外に若干英語の学習をする機会をすべての児童が持っている。各レッスン（20 分から25分くらい）のビデオ画像記録（音声あり）を見て、メモによる記録と Linguistic competences と Pragmatic competences の項目の数値による評価を実施した。メモによる記録は、学習上、指導上のいくつかの留意点および特記すべき点があれば、メモするようにした。Teacher error correction、waiting time 、 sustained speech など COLT（Communicative Orientation of Language Teaching Observation scheme）のカテゴリ等を参考にした観察シートも用いた。講師と子どもの英語に関しては、定型会話等は気になる点のみ記述し、自由会話は聞いたままの英語をメモするようにし、談話分析も必要であればできるようにした。

このオンライン学習の特徴は、1 対 1 の対面方式であり。様々な指導の可能性を示唆する場面を観察できた。第一に発音指導である。児童の発音を確実に聞きフィードバックを与えられる。第二に waiting time を長くとる講師の場合、子どもに考える時間が取れる点である。ほかの児童が発言したり解答してしまったりすることもない。第三に rapport の確立である。

T: Taro, how are you? C: I'm fine.

T: I play games on Saturday. What do you do on Saturday? C: I play Karate on Sunday.

T: On Saturday? （犬同士が空手をしているような写真に Taro（偽名）うける。）

C: This is trophy. T: What's this?

C: Karate trophy. T: Is it for Karate?

C: Yes. T: Ichiban? C: Three!

この会話は小学校4年生になりたての男の子とこの子のレッスンの多くを担当した男性講師の間のものである。楽しそうに会話をしていたのが印象的である。レッスン1では挨拶もうまくできなく、毎回保護者が付き添いながら学習を進めていった結果、レッスン 10 ではこういった会話を観察することができた。他の要因もあっての結果であるが、非常に人間関係がよいことが大きな要因の一つと考えられる。子どもたちは自分のことをもっと伝えたいという気持ちになっていった、という回答は多くの子どもたちから、また保護者からある。

保護者と児童の関わりは少なくとも二つの着眼点から考察する必要がある。1つは ZPD(最近接発達領域説、Zone of Proximal Development)であり、もう一つは日本語使用の点である。B、G の母親は、B、G がオンライン学習に取り組んでいるときは常に子供のそばにいて、アドバイス等を送っている。母親からの毎レッスンのコメントを読むと B、G が自力でできるところと、まだ十分には自力でできないところをよく把握し、必要とあれば家庭内でその表現を用いるようにしていることが読み取れる。受講中の子どもの表情について、毎回コメントしている。子どもの取り組んでいる活動を見て、その時の子どもの表情をよく見ている。自分のこどもの ZPD を把握し適切なアドバイスをしている可能性もある。実際、B と G の Linguistic competences（「単語や表現を知識として知っていて、使える力」と定義)はプログラム開始当初とレッスン 11, 12 の終了間際では格段に上がっている。(それぞれポイントが1.5倍になっている。)

一方、日本語使用の点であるが、観察して

いて、A、B、G の保護者の声が時折聞こえてきた。講師が話している英語の日本語の意味を確認、子どもが何をすべきかを促すことが目的の場合、取り組み方を子供がよくわからず日本語・英語でデモンストレーションをする場合、講師への返答例を解説と共に示す場合などがある。どの程度日本語で子どもの学習補助をすべきか、これは相手の講師、子どもの理解度等によるかもしれないが、保護者の「声」の教育的効果に関しては今後の課題である。

Waiting time、rapport の確立(特に ALT やボランティアアシスタントと児童間)、ZDP の把握の課題、日本語使用の件、などすでに SLA の研究では挙がっている問題ではあるが、あらためて小学校外国語活動における各項目の意味を考察したい。

2009～2012 の研究は以上とし、2013 年度以降もそれまでの研究成果を基に、観察シート作成のための研究を継続する。2013 年度以降は、2012 年度までに見出してきた着眼点を精査し、観察項目として観察シートに取り込み、COLT で必要と思われる観察項目の取捨選択をし、試験的に授業観察に用いていく。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① 満尾貞行、小学生のための英語オンライ学習の可能性、ARCLE Review、査読あり、no.7、2013、pp.79-89
② 満尾貞行、Classroom Research for Foreign Language Classes、横浜国立大学 大学教育総合センター紀要、査読あり、第二号、2012、pp.51-70
③ 満尾貞行、公立小学校教員の外国語活動指導力アップのための研究 Part1、横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅰ、査読なし、No.13、2010、pp.175-187

〔学会発表〕（計 16 件）

① 満尾貞行、異文化教育と英語教育、横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校平成 24 年度研究発表会、平成 25 年 2 月 19 日、附属中学校、2013 年 2 月 23 日、附属中学校
② 満尾貞行、“Hi, friends! 2” を用いた授業、八王子市小学校教育研究会、2012 年 11 月、八王子市立みなみ野君田小学校
③ 満尾貞行、横浜国立大学教育人間科学部附属横浜小学校・中学校の連携、横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校平成 23 年度研究発表会、2012 年 2 月 19 日、附属中学校
④ 満尾貞行、「外国活動の進め方および授業評価と分析」、八王子市小学校教員パワーアップ研修、2011 年 6 月 10 日、八王子市立美山小学校（八王子市）
⑤ 満尾貞行、「授業評価と分析」、横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校平成 22 年度研究発表会、2011 年 2 月 19 日、附属中学校
⑥ 満尾貞行、「外国活動の進め方および授業評価と分析」、八王子パワーアップ研修、平成 22 年 7 月 27 日、八王子市立高嶺小学校
⑦ 満尾貞行、「小学校外国語活動の考え方と進め方」、八王子パワーアップ研修、平成 22 年 7 月 25 日、八王子市立第四小学校
⑧ 満尾貞行、A Japanese COLT: Analyzing teaching performance in a junior high school practicum、博士論文ディフェンス、平成 22 年 1 月、テンプル大学ジャパンキャンパス

〔図書〕（計 3 件）

① 満尾貞行、東京教学社、“Classroom Research in the Field of Language Education”井田好治先生米寿記念論文集、2010、pp. 150-175
② 満尾貞行、ProQuest LLC、A Japanese COLT:Analyzing Teaching Performance in a Junior High School Practicum（博士論文、アメリカ、Temple University）、2010、352

６．研究組織

(1)研究代表者

満尾　貞行（Mitsuo Sadayuki）
横浜国立大学　大学教育総合センター准教授
研究者番号：60229739